



軍服

士

女官は

淫の花

園子

氷高

イラスト  
桜 遼



軍服士官は姦淫の花〔特別版〕

《立読み版》

氷高 園子

イラスト 桜 遼

板張りの床は、冷たい。

二穂忍は、そのことを自分の頬で知った。髪を引き掴まれ床に押しつけられ、体の自由を奪われている。四肢はどう押さえられているのか、身動きができない。

「……っ、うっ！」

腕を後ろ方向に引つ張られ、肩が痛んだ。しかし忍の呻きに頓着する者はない。それどころかもっと強く引つ張られ、もう片方の腕もねじられた。忍の抵抗を封じ込めるように。

「生意気に、声も上げやがらん」

忍を押さえ込むひとりが、声を歪ませた。

「ちよっと泣きでもしたら、かわいいのにな」

「かわいいのは顔だけか？」

腕を引き上げられる。立ち上がらされて、顎をぐっと掴まれた。上を向かされて、忍は視線に力を込めた。殴られた頬は腫れ上がっているらしく、ひりひりと痛む。血の味がするのは、殴られたときに切

ってしまったのだろう。腿ももや腰こしには蹴あられたところが痣あざになっているだろうし、床とこに這はいつくばり、まだ何度も手を通していない制服は埃ほこりだらけだ。

きつと情けない格好をしているに違ちがいない。それでも忍しのは、まなざしにだけは力を込めてまわりの者たちを睨にらみつけた。

「生意しやうい気きな」

目の前の男が、ぺっと唾つばを吐ついた。生ぬるい液体が頬ほにかかる。それを見て、男を囲かこむ者たちがげらげらと笑わらった。

「おきれいなお嬢ぢやうちゃんには、お似に合あいの化粧けしやうだよ」

「ここは士官しやん学校がくだぞ？ 女に学が校くと間ま違ちがえたんじゃないのか？」

「まったくだ」

ここは相武台さうぶだい——座間ざまに位置する陸軍士官学校。忍はその士官生徒として入学したばかりだ。

入学式の、すぐあと。寮りやうに向かうはずだった忍は、廊下らうかの角を曲まったところでききなり後ろから腕うでを掴つかまれ、引き寄せられた。強い腕はひとりのものではなく、忍には抵抗ていこうの術すべもなかった。

口は大きな手に封ふうじられて、声を出すこともできない。忍は廊下を引きずられ、どこもしれぬ埃あっ

ぼい場所に連れ来られた。そこで四人の男たち——皆、同じ制服を着ていた——に、殴られ、蹴られた。こういうことは、あるものだと思っていた。男ばかりが膝をつき合わせ、二年近くの日々を学ぶのだ。拳にものを言わせるようなこともあるだろうと思っはいた。

しかしそれが自分の身に降りかかることになるとは。しかも、入寮の初日に。目の前の男は、歪んだ笑みで忍を見ている。目だけを動かして右を見て左を見た。それぞれ何かを企むたくらような表情で、忍の顔を見やっていた。

「う、あつ！」

後ろから、背を蹴り上げられた。忍の体は崩れ落ち、しかしそのまま横たわることはなかった。腕をねじ上げられたまま中途半端な体勢でぶら下がることになってしまい、腕のつけ根がひどく痛んだ。

「来るところを間違えた罰を、与えてやらなきゃな」

目の前の男が言った。

「ちゃんと、自分の行くのは女学校だってわからせてやらないと」

次はどのような殴打が来るのだろうか。背を蹴られるのか頬を殴られるのか。忍は低く息を呑んだ。

密かに奥歯を噛みしめて、次に来る衝撃に耐えようとする。

「……あ、……っ？」

しかし、忍を襲ったのはどちらでもなかった。男の手は、腰にかかった。制服の革ベルトの留め金が外される。釦ボタンが外される、前立てが引き下ろされる。

「な、……っ……」

忍のズボンは、膝のあたりまで下ろされた。下穿したばきだけに覆われた下肢かみを晒して、その場に立たされている。

「いい格好だ」

「白い肌しやがって。やつぱり少女メツチエンだったみたいだな」

「メツチエンだ。『花』ブルーメだ」

「——『ブルーメ』？ 花……？ なんの、こと……」

『ブルーメ』がドイツ語で『花』だという、言葉の意味はわかっている。しかし自分が『花』などと呼ばれるわけがわからなかった。男たちはいったい、どういう意味で言っているのか。何を模して忍をそう呼ぶのか。

男の手が、裏から腿をすべった。忍は思わず身を震わせる。

「反応してやがる」

「感じてんのか？」

下卑た笑い声。二度三度と下肢を撫なでられ、臀しりを掴まれる。ぐっと押し広げられ、下穿きの下に冷気が忍び込む。

「脱がしまえよ、それ」

その声に、下穿きが解かれた。両腕を拘束されている忍には、抵抗の余地はない。そうでなくても男の手は素早かった。こうすることに慣れていている手だ。

「『花』はおとなしく、花ブルームらしくしていればいいんだよ」

上は着たまま、下半身は何もまとわず、ズボンが膝にまとわりつき、足には軍靴を履いたままの格好で、忍は立たされている。このような格好に羞恥を感じないはずがない。かっとなりが赤くなったのが、男たちに見られていなければと願った。

※続きは製品版でお楽しみ下さい。

軍服士官は姦淫の花「特別版」

《立読み版》

発行日 2011年8月18日

著者名 氷高 園子

イラスト 桜 遼

発行所 【MILK-CROWN】

株式会社水晶院

<http://www.milk-crown.net/>

(C) Sonoko Hidaka 2011

※本著作物の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。